A 15　総合科学としての家政学

福岡女学院短大　嶋田　英男

目的　広義の家政学は総合科学である、と見るのが、日本家政学会主流の考え方ではないかと思われる。私もそれに原則として賛成である。1968年の拙著『科学としての家政学』公刊以来、現代科学論をふまえた上で、統一科学あるいは総合科学（人文科学・社会科学・自然科学の3分野を含む）であるべきことを述べてきた。「家政学は雑学である」との批判に答えるためでもあった。この総合科学論は、1984（昭59）年9月、日本家政学会編『家政学将来構想1984』が刊行されたとき、矢部章彦前会長がその「序」にこの書がまとまるまでの過程において柱となった構想として三つを挙げ、第一に家政学は人文・社会・自然の3分野の融合による総合科学として位置づけること、（第二に家政学原論の確立が急務であること、第三に家政学の社会への貢献の必要性を強く意識することである）と述べているところに、日本家政学会の最近の潮流のようになってきたのであろうと考えざるを得なかった。改めて、総合科学論と家政学との関係、その問題点超克の方法などを考え、学として家政学の確立と発展に少しなりとも寄与できれば幸いであると思った。

方法　家族の生活を核とし、自然・社会・人文の各分野を重層的な構造として組織的、体系的な学問を構築し、立体的な相互協力によって、共通の目的を実現し易くする。関係諸学は独立の総合科学として統一され、雑学性を払拭できる。

結果　自然現象のように一挙に変革、実現できるものではないが、実践と思索・共同研究などによって、きわめて水準高く、有効な独自の総合科学の樹立が20世紀中には可能となるはずである。